

# ドル/円相場のトレード戦略

## 【ドル/円 週足】



### ■中期展望

2019年の展望を考えるに当たり、昨年2018年を振り返ってみると、当初想定していたように2017年と同様のレンジ相場が継続してしまいました。

年間の値幅は10円を下回り過去最少、2017～2018年の2年間を通して値幅は14円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が協調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、年明けの1月3日に108円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に4円以上の下落という動きが引き起こされました。

107円半ば以下では、公的年金のドル買いのうわさもあり、現在ではややドルが持ち直していますが、依然不透明な状況が続いています。

今後の相場は、米経済の成長が鈍化するのか、それに伴って米国の利上げが打ち止めとなるのか

## ドル/円相場のトレード戦略

注目されることになるでしょうが、1月の米FOMCでは声明文から追加利上げのバイアスが削除されたことにより政策スタンスが大きく変わった可能性が指摘されており、当面の上値は限られたものとなりそうです。

ただし、その後の米経済指標は好調を維持するものも多く、早期に明確なファンダメンタルズの変化が起きる可能性は低く、また適温相場期待で米株式市場は堅調を維持しており目先ドルは底堅く推移しそうです。

当面は、108円から114円程度のレンジが想定されます。

### ■短期展望

先週は、112円水準でスタートし、日米貿易協定交渉への警戒感からドルの上値が重かったものの、ライトハイザー代表が会見で為替への言及を見送ったことで年初来の高値を更新、一時112円17銭を付けました。しかし、その後はドル買いのフォローはなく反落し111円77銭まで押し戻されました。

ただし、週間の値幅はわずか40銭程度で、膠着した相場が続いたといえます。

今週も、日本の10連休入りを控え、ドル/円の同意は乏しくなるものとみられ、112円水準を中心とした膠着相場が継続しそうです。10連休前にポジション調整が起きた場合のリスクは円高方向にあります。その場合でもドルの下値は堅いものと思われ111円は維持されるものと予想します。したがって今週のレンジは、111円～112円50銭を想定します。